

# 大里七夕踊にみる民俗芸能の伝承組織の動態

俵 木 悟

## 1. はじめに

民俗芸能の伝承を考える際に、伝承組織の問題はいつも大きな比重を占めている。そもそもある芸能を「民俗芸能」としてくり出す際に、その芸能を担う主体が一つの条件となるというのは、民俗芸能について何か語ろうとするほどの者なら真っ先に思いつくことだろう。かつて、存在が民俗的であり、あるいは民俗学的考察の対象として取り上げられた芸能はすべからず民俗芸能であると定義した池田弥三郎は、その「民俗的」というあり方を、季節（時）、舞台（場所）、俳優、観客、台本などの制約に求めたが〔池田 1972〕、これにならえば民俗芸能の伝承組織とは、「俳優」すなわち演者に関わる制約または条件によって規定される組織や集団のことである。しばしば民俗芸能の演者は、専門的・職業的な芸能演者に対置されて「素人の」「ノンプロの」と表現されることがあるが、だからといってそれは、誰もが演者になれるということをそのまま意味するわけではない。実際に民俗芸能として伝えられている様々な事例を見れば、本当に誰でも自由に参加できるものなど、よほど例外的なものか、あるいは意図的にそのように作られているものを除けば、まず存在しないと思えるほどである。民俗芸能の演者は、性別・年齢・出身地・身分・家格等々といった様々な属性によって規定されており、その属性から外れるものにとっては容易にその位置を占められない、しかし逆にその属性を帯びたものには義務的な役割であることが多い。

こうした演者の制約は、それが制約であるが故にしばしば本質的なものと見なされているように思われる。例えばある芸能が「一定の年齢の女性（男性）によって演じられる」という制約があったとする。それはそのまま、その「一定の年齢の女性（男性）以外は演じてはいけない」→「一定の年齢の女性（男性）以外に演じられたことはない（はずだ）」というように強化されて認識され、あたかも遥か昔からそうであったもの、今後もそうでなければならないものであるかのように語られる。

しかし実際には、こうした制約も、その大半は間違いなく歴史的に様々な状況の中で選び取られて構築されたものだろう。従来の民俗芸能の研究は、芸能の民俗的な性格の基盤となる制約を重視することで、結果的に諸々の制約を固定化してきた感が否めない。曰く「これは本来、〇〇の時期に、△△という場所において、□□によって演じられるものである」と。しかしそうしている間に、各地で民俗芸能を実践している人たちから、そのやり方ではもう続けられないという声が届くようになってきた。そうした声に民俗芸能の研究はどのように答えることが可能なのだろうか。

本稿で、一つの民俗芸能の事例を挙げて論じてみたいのは、ある制約をもって民俗芸能を担ってきた伝承組織が、どのような歴史的経緯を経て形成、維持されてきたかを検討することで、一見すると

不変に思われるその組織が、実際にはその時々<sup>1)</sup>の社会的な背景に沿って、その意味付け、機能、内実を変化させてきたという事実を示すことである。そのように過去を示すことで、現在のあらゆる民俗芸能の伝承者たちに、彼らの先人たちも歴史の各時点において彼らなりの選択を積み重ねてきたことを知ってもらい、これから彼らが進むべき道を彼ら自身で選択するための参考としてもらえればと思う。それがいま、筆者が考えることのできる、民俗芸能の研究が現実的な課題に対してできる貢献の一つである。

## 2. 大里の社会組織

本稿で事例とする大里七夕踊は、鹿児島県いちき串木野市（旧市来町）大里に伝承される民俗芸能である。現在の太里地区は近世の市来郷を構成した8村の一つである太里村にはほぼ相当し、明治22年（1889）の町村制施行によって市来郷8村のうちの大里村・川上村・湊村及び湊村の町場にあたる湊町の4町村が合併して西市来村となり、さらに昭和5年（1930）の町政施行により市来町となった。平成17年（2005）10月に北隣にあたる串木野市と合併し、現在はいちき串木野市となっている。太里の地名は大字に相当するものとして現在の地番表示の単位として残っている。

地理的には、太里地区はいちき串木野市の南東端部にあたり、東から南東にかけて日置市（旧東市来町）に接している。重平山から発して日置市湯之元などを迂回するように流れ、湊町の市来港で八房川と合流し東シナ海に流れ込む太里川の流域にはほぼ相当する。とくにその下流域は、北東方面の大半が山地・丘陵地である旧市来町において、貴重といえる広大な低地を形成しており、この低地をかんがいして太里田圃を開墾した。行政区としての太里は一部丘陵地及び東シナ海に面した海村地域を含むものの、その主たる部分はこの太里田圃で稲作農耕を行う農村地域と言えるだろう。なお太里田圃の東部の丘陵地では、昭和初年頃から柑橘類の集団農場が開かれ、現在にいたるまで温州みかんやポンカンなどを生産し、太里の名産として内外に知られている。昭和40年頃からは中原台地などでスイカの栽培が盛んになり、昭和50年（1975）には旧市来町において米に次ぐ生産額2位にまで躍進したが、近年は減少している。また北西方面には重信川を挟んで湊地区（旧湊村）と接し、ちょうどその境あたりにJR鹿児島本線の市来駅が位置しており、駅周辺は他所からの移入者を中心とした住宅地になっている。

現在の太里地区は21の集落によって構成されるが<sup>1)</sup>、これら集落は社会活動の単位として公民館名で呼ばれている<sup>2)</sup>。この集落の成り立ちを歴史的に跡付けるのは難しい。よく知られるように、幕藩体制下の薩摩藩の農民支配はきわめて独特であり、労働力の基準たる成年男子の名子<sup>なご</sup>を中心として、労働力としての用夫<sup>いぶ</sup>とその家族を家部<sup>かぶ</sup>とし、数家部を集めて門<sup>かど</sup>という末端行政単位を定め、耕地の割当及び貢納の単位とすることから、これは門割制度と呼ばれた。この門がさらに幾つか集められて方限<sup>ほうぎり</sup>を構成する。門の長が名頭<sup>みょうず</sup>であり、方限の長が名主となる。『市来町郷土誌』によると、寛政12年（1800）の時点で太里村は81門（9方限）が存在したというが、それぞれがどこにあったのかは不明とされており、現在の集落構成との関係は分からない。

また太里の中福良集落在住の木崎三平は、自身の体験から明治以降に存在した社会組織として郷中



図1 大里地区と七夕踊参加集落



国土地理院「地図閲覧サービス」より筆者作成。

について紹介している。これは現在の集落のなかに、数家を単位として構成される組織であり、例えば木場迫集落には木場迫郷中・富永郷中・八幡坂郷中という3つの郷中があったという。また、中福良集落の中福良郷中には、隣接する寺迫集落の1軒も含んでいたというように、集落とは別の原理によって構成されていたことを示唆している〔木崎 2005〕<sup>3)</sup>。木崎はこの郷中を、江戸時代の五人組と同様で、農作業における相互扶助的紐帯である「結い」のようなものではないかと述べている。その規模（1郷中に数家）を考えても、門割制度の門の名残ではないかと想像されるが確証はない<sup>4)</sup>。一方で木崎は同じ論考の中で、昭和初期の集落が師範学校の改廃によって編成し直されていること、また集落と別に農事実行組合（農事小組合）が存在し、集落の集会や連絡もこの組合を単位として行われていたことを指摘している。『市来町郷土誌』でも農事小組合は「農業という仕事を課題として、部落住民の結合を図る大きな組織であり、その活動内容は、単に農業経営の改善だけにとどまらず、もっと大きな意味をもつものであった」と述べられているが〔市来町郷土誌編集委員会 1982: pp.485-486〕、これらの各種の社会組織と、後の集落あるいは公民館の組織との連続性については、どれも明言していない。

いずれにせよ明確にたどれる範囲では、昭和15年（1940）内務省による「部落会、町内会等の整備要項」の訓令を受けて成立した部落会が、戦後になって部落公民館として引き継がれたものというのが現在の公民館の成り立ちである。昭和23年（1948）4月にはこれら部落公民館を連合したものとして市来町公民会が結成されているが、その会則第二条に「この会は事務所を市来町役場内に置き、分会である部落公民館を町内各部落に設ける」と明記されている〔市来町郷土誌編集委員会 1982: p.487〕。なお地元ではこの単位を「〇〇公民館」「〇〇部落」あるいは単に「〇〇」などと文脈に応じて様々に呼ぶが、本稿では便宜上、これをすべて集落と表記する。

集落は上記のように、必ずしも自然的に形成された生活共同体というだけでなく、行政上の末端組織として形成された側面があるということに注意したい。ただし上記の説明をもって、現在の集落に相当する紐帯が昭和15年以前には存在しなかったというわけではなく、本稿で取り上げる七夕踊への参加は、少なくとも聞き取りによってたどれる昭和初期頃からは、現在と同じくこの集落が単位となっていたことが明らかである。

### 3. 大里の七夕踊

さて大里の七夕踊は、かつては旧暦7月7日に行われていた。現在は月遅れの8月7日に近い日曜日に行われている。七夕祭と呼ばずに七夕踊と呼ぶのは、これが特定の寺社の祭礼に奉納されるものではなく、農民たち自らが作り上げ、伝えてきたものであると信じられているからである。実際はかなり大規模な民俗芸能であり、地区内の多くの寺社を踊り巡りながらも、どの寺社でも神事や法会を行わない。農民たちが、自分たちの生活に直結する祈願を込めながら、同時に年に一度の楽しみの機会としてこの踊りを伝えてきた、まさに農民主体の民俗芸能だといえるだろう。

七夕踊には、大里地区の14の集落が参加する。参加する集落は、弘山、松原、堀、平ノ木場、中原、島内、宇都、門前、木場迫、中福良、寺迫、下手中、陳ヶ迫、池ノ原である。大里にあっても、例え

ば崎野、戸崎集落は漁業を生業とすること、あるいは佐保井、駅前集落は新興の住宅地であることと  
いうように、大里田圃を中心とした農業に関わりの薄い集落は参加していないことから、この踊りが  
農業によって成り立つ地域の生活と密接に関連していることは明らかである<sup>5)</sup>。

踊りそのものは大きく太鼓踊り（テコオドリ）と垣回（カッマワイ）から成っている。その構成は  
以下の通りである。

## 1 太鼓踊り

太鼓踊りは各集落から最低1名ずつの踊り手（ヤッサ（役者）とも呼ばれる）を出し、これに  
子どものカネンシ（鉦打ち）、イデコ（入太鼓）が加わって演じられる。これが七夕踊りの本踊  
りと考えられており、最も重要な構成要素である。踊り手は襟と袖に黒の縁取りのある広袖の上  
衣に裁着袴、頭には竹で杵を作り色紙で美しく飾った花笠を被り、左手に杵付き締め太鼓、右手  
にベ（桴）を持って、歌いながら踊る。一番ドン、二番ドン、イデコ引き、座引きなどの役があ  
り、一番ドン・二番ドンは七夕一週間前の踊り相談で決められ、他はナラシ（稽古）の期間を通  
して踊りの技量を評価して選ばれる。

## 2 垣回

### (1) 作り物

踊り場において太鼓踊りを取り巻くように演じられるのが作り物（ツクイモン）である。作  
り物はシカ・トラ・ウシ・ツルの4種類で、この順番に踊り場に練り込み演じられる。このう  
ちシカは宇都、トラは島内、ツルは門前と担当する集落が決まっている。ウシは①木場迫と中  
福良、②寺迫と陳ヶ迫、③弘山と松原、④堀と平ノ木場、⑤中原の5つの集落の組み合わせか  
ら、毎年2～3頭を出すことになっている。どれも身近な材料で作られた大型のもので、中に  
人が入って動かしたり、踊り場では寸劇を演じたりする。踊り場の広い門前河原場所などでは、  
太鼓踊りの演技のあいだはその周囲を回るが、これは本踊りである太鼓踊りが観客に邪魔され  
ないようにとの意味があるという。

### (2) 行列物

踊り場から次の踊り場に向かう道中、及び踊り場への練り込みに際して行列を作り演じられ  
るのが行列物である。行列物は琉球王行列、大名行列、薙刀行列の3種類がある。琉球王行列  
は木場迫と中福良が担当する。大名行列は①弘山と松原、②中原が担当し、基本的にウシを出  
さない年に行列に参加する。薙刀行列は①下手中と池ノ原が毎年、②寺迫と陳ヶ迫が牛を出さ  
ない年に参加する。練り込みは作り物に続いて琉球王行列、大名行列、薙刀行列が続き、太鼓  
踊りを先導する。薙刀行列の一部は太鼓踊りの後にも続き、後払いの役割もする。また、かつ  
ては兜（甲冑行列）も行列物として出ていたが、現在は演じられない。

本稿の目的は七夕踊の全体を詳述することにはないのでこの程度に止めるが、これだけでもこの踊  
りが相当に複雑に構成されたものであることは理解されるだろう。またそれと同時に、14の集落がそ  
れぞれ担当を持ち、一面では協力し合い、また一面では競い合いながら踊りを伝えているという地域  
の社会組織と民俗芸能の有機的な関係が見て取れる。

大里の七夕踊は、昭和56年（1981）1月に「市来の七夕踊」の名称で国の重要無形民俗文化財に指定されている。民俗芸能の国指定が昭和50年に実質的に始まったことを考えれば、かなり早い時期の指定であり、文化財的な評価はすでに十分になされた例と考えられるかもしれない。その文化財指定に際して、七夕踊は以下のように解説されている。

この芸能は、市来町大里部落の七夕の日に行われる風流の踊である。

芸能次第としては、まず前踊として作り物の鹿、虎、牛、鶴などの大張子や琉球王、大名、薙刀踊などの一行が列をなし、次に本踊としての太鼓や鉦を持った太鼓踊が続き、ついで後踊として薙刀踊が続く。この変装仮装した者たちの行列の群行は、芸能演出法としてたぐい稀な特色ある形であり、大里部落多数の者が何らかの役割を担って行列に参加する規模の大きなもので現在は三、四百人が行列する。

この芸能の中心は、太鼓、鉦を楽器とする本踊にあり、古風な歌詞によって青年と子供の総勢三十余名によって演じられる。青年の踊り子はヤッサ（役者）とも呼ばれ、一番ドン、二番ドン、イデコヒキ、ヒラデコなどの役に分かれ、子供の踊り子はカネウチ、イデコといった役に分かれる。このように太鼓踊が前踊、後踊をともなった形で演じられるのはきわめて稀で特色がある。

この踊の由来としては、一説には島津義弘の朝鮮の役の凱旋の祝賀芸能だったといわれ、踊り一行各役の扮装には丸に十の字の島津氏の紋がつけられる。また他の説では、部落の開田者床禱到住【とこなみとうじゅう】の霊を慰めるために行われるのだとの伝承もあり、一方作り物は動物の精霊を示すものと考えられることなどから、これは七夕の日の踊とはいえ、亡き霊を供養する盆行事の前祭りの性格もうかがわれ、注目すべきものである。

文化庁「国指定文化財等データベース」(<http://www.bunka.go.jp/bsys/>) より

この解説文を読む限り、その評価は、一つは前踊・後踊を伴い行列の一部として演じられる太鼓踊りという様式的特色によって、そしてもう一つは、朝鮮出兵や部落の開田にまつわる由来や、精霊供養という踊りの目的の語りによってなされていることが分かる。

それに対して伝承組織については、この解説文ではほんのわずかに触れられているに過ぎない。これは七夕踊に限ったことではなく、無形民俗文化財として民俗芸能を評価する場合の常套的な語り口であるように思われる。しかし、こうした説明が果たして、現在これを受け継いでいる人々に、どれほどの現実味をもって受け入れられているだろうか。筆者にはどうにも心もとないと思えない。実際の伝承者たちがこの踊りに見いだしている意義は、もっと実践的な、自分たちがこの踊りに関わることを律している仕組みにこそ求められている。それこそが伝承組織としての集落ごとの青年団の存在である。



## 4. 七夕踊と伝承組織としての青年団

### (1) 集落青年団の七夕踊への関わり

大里の七夕踊においてその最も重要な特質と目されているのは、これが集落の青年たちの全面的な参加と、集落青年団間の協力と競争の意識によって成り立っているということであろう。

とくに太鼓踊りの踊り番を務めることは重要であり、多くの集落で、この踊り番を務めることが、青年団を退団する必要条件の一つとなっている。これを務めないものは、たとえ青年団の退団年齢に達したとしても団を「上がる」ことはできない。

この規約は、かつて青年の数が多かった時代には、青年のすべてに適用されるものではなく、基本的に踊り番を務めることができるのは長男のみであった。七夕踊参加集落の一つである寺迫青年団では、戦後の団の規約をよく残しているが、それをみると、昭和29（1954）年の「諸行事規約帳」には「昭和二十九年ノ踊りヨリ長男ハ踊ルモノトス」とあり、昭和36（1961）年の「七夕踊細則」には、「踊番は団員各戸より一名づつは必ず出すものとし、原則として長男が踊る。但し、長男にして踊ることが出来ない場合は責任を以って代りを出すこと。代番は二、三男とし、出来ない場合は他人であっても差支えないものとする。」とより細かく定められている。これが昭和57年（1982）の「昭和五十七年度八月七夕踊り 規約」では、七夕踊り番について「一、団員すべての者について踊る事とする。一、年令については制限なしとする。一、踊らざる者は退団年令に達しても退団出来ぬものとする。」となり、長男という制限はなくなりすべての団員が踊るべきものとなっている。また諸々の理由により踊り番を務められない者は代番を立てることができたが、それも不可能な場合は一定の金銭を納めることによって踊り番を務めたと見なすという規約がある。このように、太鼓踊りを務めることは青年にとっての義務でもあり、青年団を上げる、すなわち壮年として認められるための条件にもなっているのである。

今でも大里出身の青年は、たとえ就学や就職の都合で転出していたとしても、青年のうちに必ず一度は大里に帰ってきて、太鼓踊りの踊り番を務めなければならない。これは言うほど簡単なことではない。というのも、踊り番を務めるというのは、七夕当日だけの問題ではないからである。大里七夕踊の太鼓踊りの稽古はナラシと呼ばれ、七夕踊の再興に関わったとされる伝説的人物である床次<sup>とこなみとうじゅう</sup>到住の碑が建つ中福良集落の一軒の庭（堀ノ内庭）に、すべての集落の青年たちが集まって、七夕当日の一週間前から毎晩続けられる、それ自体がたいへん組織化された実践である。さらにこの期間には、堀ノ内庭でのナラシが終わった後も、各集落に戻って公民館などで集落の代表たる踊り番の青年と、指導者である庭割を中心に、ウチナラシと呼ばれる稽古が深夜にまで及んで行われる。踊り番を務めるということは、必然的にこの一週間のナラシ及びウチナラシの過程に通して参加するということを意味する<sup>6)</sup>。東京や大阪などの遠方に就職した青年などは、このために何年も前から勤務先と交渉して一週間以上にわたる休暇を獲得しなければならないこともあるという。

さらに、太鼓踊りの踊り番になっていない青年も、七夕当日の作り物・行列物を担うこと、及びその準備に参加することがなれば義務と見なされる。多くの青年団では、七夕当日とその前日（作り物・行列物の準備等）と翌日（庭上りと称する、地域の青年以外の人々を招いての慰労会）に参加し

なかったものは、その年の七夕踊に不参加と見なされ、不足日当を支払わなければならない。また大里に在住の青年は、期間中は毎日、太鼓踊りのナラシ及びウチナラシに参加して加勢をするのが当然と見なされる。堀ノ内庭のナラシでは、自分の集落の太鼓踊りの踊り番の後ろにつき、団扇で扇いだり汗を拭いてやったり、あるいは少しでも自分の集落の踊り手が良く見えるように、経験者であればアドバイスをしたり、歌を歌ってやったりする。

とくにナラシの期間を通して負担が大きいのは、コニセと呼ばれる新入の青年である。筆者が集中的に参与観察させていただいた集落の場合、堀ノ内庭のナラシには、まず夕方に公民館にすべての青年が集まり、大丸と呼ばれる集落の青年団の提灯に火を灯して皆で連れ立って向かう。コニセの青年は皆が集合する30分ほど前には公民館に来て、夜のウチナラシのために公民館の前庭を掃きならして水を撒き、畳床を掃除し、あるいは加勢に来る集落の人たちのために湯を沸かしてお茶を出す準備もしなければならない。他にもナラシが始まる前日には、フレマワリと称して集落内のすべての家を回って歩き（電話を使うことは許されない）、その年の踊り番を知らせるとともにウチナラシへの加勢をお願いして回る。また七夕当日はタルイネ（樽担ぎ）として、踊り番や他の青年たちに供給する水や焼酎の入った樽やクーラーボックスを運搬し、またマッカケと称して、略式で済ます踊り場所を太鼓踊りの踊り番に代って回らなければならない。それでも近年は、場所間の移動距離の長いところは車を使ったりするので負担は減ったと言われるものの、一方でかつてのように毎年新しい青年団員が加入してくるわけではないので、場合によってはこの役からかなり長い期間解放されない者もいる。

こうしてみると、七夕踊への「参加」とは、実質的には、封建的ともいえる様々な規範に従うことである。もちろんその負担の大きさや、「昔からのしきたり」としか説明できない規範のある種の理不尽さに対する不満がないとは言えない。しかし、多くの青年、ことにこの過程にある程度の期間関わってきた比較的年長の青年たちの、この踊りにかける熱意は今でもたいへんなものである。その理由を筆者の調査の経験の中から推し量るなら、一つは集落ごとの対抗意識が強いことが挙げられるだろう。青年団がどの程度まとまっているか、どれだけ熱心に七夕に取り組んでいるかは、たとえば全集落が集まるナラシの庭に、その集落の青年がどれだけ集まっているかでお互いに値踏みされている。太鼓踊りの技量や作り物・行列物の出来栄と並んで、集落青年団のまとまりそのものを競う意識が、七夕踊の隠れた次元にあり、各集落青年団を駆り立てているのは間違いない。またもう一つは、七夕踊に関わる様々な経験が、大里という地域に生きる者としてのアイデンティティの形成に大きく関わっていることが挙げられる。すでに青年を退いた人たちも、自集落の踊り手を見守り青年団を励ますために、夜のウチナラシにやってきては各々の七夕踊の思い出を語り、青年時代からの仲間との結束を確認し合い、また七夕にあわせて帰郷した転出者と旧交を温め合う。そして太鼓踊りで一番ドンやイデコ引きなどの大役を務めた者は、その後も地域の中で一目置かれる存在となる。いわば地域のつき合いの一つの結節点であり、大里の集落に生まれ育った者としての自分を確認するための、年に一度の重要な機会として七夕踊が存在しているのである。

## (2) 青年団員数の動向

このように、大里七夕踊は青年団という集団の活動として地域の生活に根付いている。しかしこの



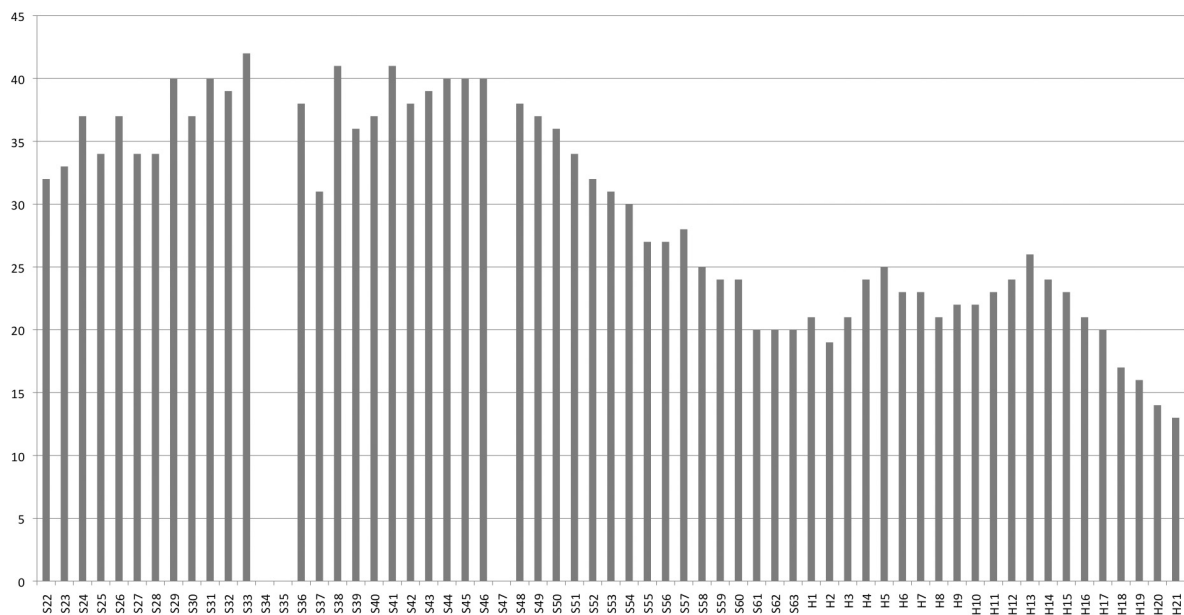
青年団の組織の存続が、いま大きな困難を迎えている。その理由は端的に、地域における若年人口の絶対的な低下である。

『市来町郷土誌』には明治36年（1903）以来の人口動態が掲載されているが、それをみると、第二次大戦以前の町内総人口はおよそ8千人で安定して推移しているが、戦後の昭和22年（1947）に1万人強まで増加する。そして昭和30年（1955）を境に顕著な低下に転じている。この人口低下は昭和50年頃に7500人程度で一段落し、以降は7千人強まで、若干の減少で推移している。平成17年の国勢調査での人口は7114人となっている。

さらに大里地区の七夕踊参加14集落の人口動態を見てみると<sup>7)</sup>、昭和30年代の前半に顕著な低下があり<sup>8)</sup>、以降昭和40年代半ばまで低下が続いている<sup>9)</sup>。その後しばらくは安定するが、昭和60年（1985）頃を境にふたたび低下し、現在に至るまで漸減している<sup>10)</sup>。これを見ると、市来町全体と比較しても大里地区の七夕踊参加集落は、この20年ほどの人口流出が目立っている。

ただし青年団の成員数はこれと必ずしも一致して推移してはいない。地区内の青年団員数の詳細を把握することは困難であるが、七夕踊参加集落の一つである寺迫青年団では、「七夕踊日記帳」として、昭和22年に踊りが復活して以降、毎年の青年団員の名前をすべて記録しており、これを参考にある程度、青年団員数の動向を把握することが可能になる。その人数を年ごとのグラフに表したものが図2であるが、青年団員の数としては、昭和40年代の半ばまではおよそ35名から40名の範囲で、むしろ微増している。そして、昭和46年（1971）頃を境に減少に転じ、平成元年（1989）頃まで漸次低下、その後平成5年（1993）、平成13年（2001）をピークとする小さな山があるものの、平成13年のピーク以降はふたたび大きく減少し、現在は10名強となっている。特徴的なのは、地区の人口が激減した昭和30年代及び40年代を通して、青年団員数は比較的安定していることである。これはいわゆる団塊と呼ばれる戦後第一世代が青年団員として活動するのが、ちょうど昭和30年代後半から40年代にあたること、また青年団員は、その集落の出身者であれば、一時的に地区を離れて就学・就職したような

図2 寺迫青年団の青年団員数（昭和22年～平成21年）



者もそのまま団員として扱っていることなどが理由であろう。

### (3) 青年団の組織及び活動の変遷

次にこの地区の青年団の制度上の変遷をみてみる。とはいっても、実際には戦前期の各集落における青年団の活動を知ることができる資料は非常に限られており、ある程度は旧市来町全体の青年団活動のなかから推察しなければならない<sup>11)</sup>。

この地域での青年団の起こりをどこに求めるかは難しい問題であるが、今でも年配者たちは青年もしくは青年団をニセ（二才）と呼び、また青年団内でも新入団員をコニセ、中堅団員をナカニセ、団長をニセガシタ（二才頭）などと呼ぶように、近世に二才組・二才中などと呼ばれた組織と連続したものと考えられるのが普通である。

鹿児島県下の青年組織は、近世鹿児島城下の郷中教育の主体としての二才が範となったと考えられる。城下の方限の中に郷中という若い者の組織が生まれ、とくにその中心となる、14・5歳で元服してから一般的に24・5歳で妻帯するまでの青年のことを二才と呼んだ。二才は慶長元年（1596）に新納忠元が定めたという「二才咄格式定目」の教えに従い<sup>12)</sup>、武道を嗜むとともに郷中内の結束を固め、諸々の心掛けと作法に従うこと、とりわけこの組織が「咄相中」などとも呼ばれるように、何事にも組織内で議論を尽し協力することがその指針となった<sup>13)</sup>。

もちろんこれは城下の士族社会の制度であるが、近世薩摩藩では各地方にも外城と呼ばれる支城を設け、そこを中心とした行政組織を作り上げていた。この外城がおおよそ天明期に郷と改称され、地域行政を担うことになる。この外城制度の中で各外城（郷）にも鹿児島城下と同様の教育方法が広められ、農村部の青年組織もその影響を受けて、二才組・二才中などとして郷中教育の精神を受け継いだと考えられている。ただし近世において大里地区の二才組がどのような活動をしていたのかを具体的に知るための資料は管見の限り見られない。

やがて、明治38年（1905）の内務省地方局長の「地方青年団体向上発達ニ関スル件」や文部省普通学務局長の「青年団ニ関スル件」の通牒などを受けて、全国的に青年団の組織化が奨励される。この背景には、日露戦争における若者の軍事後援活動を国家の支配体制に組み込む意図があったと考えられる<sup>14)</sup>。そして大里地区でもこの頃から、二才組・二才中が青年団として再編されたようである。『市来町郷土誌』には、大里の中原集落の「七夕踊入目取揃帳」に、明治40年（1907）には「中原二才・三才中」とあるのが、大正4年（1915）には「中原青年中」となり、また大里地区外ではあるものの、旧市来町平向集落の「日待馬掛帳」の明治45年（1912）に「平向二才中 青年中」と併記されていることが紹介されており、明治末年頃を境に「青年中」などの呼び方に移行したことが分かる。大正12年（1923）刊の『日置郡誌』によれば、その後大正5年（1916）に日置郡連合青年団が組織され、また大正10年（1921）には郡連合青年団下の村青年団の組織が系統的に変更され、西市来村青年団は4分団、団員は15歳より25歳までによって組織されていたとある〔鹿児島県日置郡 1974〕。こうした動きは、大正5年の中央報徳会青年部（後に青年団中央部に改称）の結成、大正10年の財団法人日本青年館の設立、そして大正14年（1925）の大日本連合青年団の成立といった一連の半官半民の青年団指導機関の組織化と歩調を合わせており、いわゆる「官製青年団」としての再編であったことは言うま

でもない<sup>15)</sup>。

七夕踊参加集落の一つである中原青年団には、昭和2年（1927）から昭和13年（1938）1月までの活動日誌が残されており、これによってある程度、昭和初期のこの地域の青年団活動の様子を知ることができる。中原青年団は、昭和2年に「中原倶楽部」と称する学舎を建設し、そこを青年の集会所として活動の拠点としている。これによると、当時中原青年団は西市来村4分団<sup>16)</sup>のうちの川南分団に所属しており、頻繁に分団長会議、分団役員会議が開かれ、その決定に基づいて活動していた様子が分かる。戦前の大里地区各集落の青年団は、西市来村青年団の分団に所属する班として活動していた。分団には角力部・剣道部・競技部・弁論部が設けられ、またしばしば一夜講習会が開催され、郡の社会主事や訓導、あるいは地域の学校の教諭などが来賓として講話を行っていた。つまり当時の青年団の組織的な活動は、主に体育競技と修身教育であった。そしてこれら公式の活動以外に、班ごとに地域内での奉仕活動や活動資金調達の活動を行っていたらしく、中原青年団の日誌には、縄練会、煙草乾燥時期や年末の夜警、道路掃除、電灯料の徴収、祝祭日の国旗掲揚、道路や危険物入れなどの修繕、麦酒製造といった活動が書かれている。また昭和3年（1928）の御大典には奉祝行事を行ったり、満州事変後の昭和7年（1932）からは出征兵の武運長久祈願、凱旋兵の出迎えを頻繁に行い、あるいは千人針を作成するなど時局を反映した活動も行われている。昭和10年（1935）には七夕踊の踊り番についても、徴兵検査前の21歳までに済ますことが取り決められ、それができぬ者は手踊りか金銭で済ませることとされている。

こうしてみると、戦前の集落青年団の組織は、基本的に郡及び村の青年団に従属する班というかたちで編成され、その活動も郡や村の青年団役員によって指導され、分団単位で従事する公的なものを中心となっていた。その一方で集落内の奉仕的な活動などは、集落青年団独自の、いわば私的な活動として行われていた。七夕踊への参加はどちらかと言えば後者の領分にあるものだが、その中では特別に厳格な義務として受け止められていた。

では、こうした青年団の活動は戦後どうなったか。七夕踊参加集落の一つである寺迫青年団は、早くも昭和21年（1946）1月に規約を改訂している。基本的にその団則は、青年としての一般的な心構えや礼儀を説くものであるが、第四條に「団員ハ一致協力シ団ノ向上ヲ計ルベキ事」として、「一、非常ノ場合（火災等）／二、行事ノ場合（新年会・七夕祭・花見・墓堀り）／三、会合ノ場合（不時会合、修養、協議）／四、事業ノ場合（開墾、道路修理）」という具体的な活動内容がうかがわれる項目が立てられている。なお、寺迫青年団もその範囲にある市来校区青年団は、昭和21年5月に再建、すでに前年に再建されていた川上青年団とあわせて、昭和22年に市来町連合青年団が組織されるが、戦前と比較すると、町連合青年団や校区青年団といった広域青年団と、各集落青年団との関係は不明である。

市来町全体でも、昭和30年頃から青年の町外への流出が顕著になり、徐々に集落青年団は実質的に機能しなくなった。また『市来町郷土誌』によれば、昭和27・28年頃からは青年団活動に懐疑的な議論が団員からも目立つようになり、昭和40年代には市来町青年団は存在したもの、その組織につながる集落青年団は消滅し、町青年団は個人を勧誘する有志の組織としてかろうじて維持されるようになったという。そんななか、七夕踊に参加する大里地区の各集落では、青年団の組織は残されたが、

表1 平成21年七夕踊参加集落の参加形態等

集落	参加形態	団員	在外 団員	不参加 者	団員 年齢	七夕以外の活動	備考
A	青年団・Bと合同 (太鼓踊りも合同)	9	2	4	13～27	年末の鐘叩き	
B	青年団・Aと合同 (太鼓踊りも合同)						
C	青年団・Dと合同 (太鼓踊りは別)	19	3	0	14～28	元旦の集まり 年明け挨拶	集落全体の手伝い が必要 団員減少で青年団 の実質維持困難
D	青年団・Cと合同 (太鼓踊りは別)				14～28	無し	
E	青年団 (太鼓踊りは出す)	(未)	(未)	(未)	(未)		
F	七夕会	28	14	(未)	13～35		
G	青年団	10	2	2	(未)		
H	青年団	5	2	0	15～28	無し	公民館に協力を依 頼
I	青年団	17	8	5	数え年 14～30	夏祭り、花見、元 旦挨拶、さのぼり	
J	青年団	7	3	1	14～29	無し	
K	青年団	13	1	3	13～28	月1回会合、夏祭 り、花見等	
L	青年団	13	3	1	13～30	祝日に公民館の旗 揚げ	
M	青年団	6	2	3	14～26	無し	
N	青年団	10	4	4	13～29	無し	

#### (4) 現在の集落青年団

すでに図2で一つの集落の例を示したように、集落青年団の団員数は、戦後第一世代が退団する昭和46年頃を境に急激に減少していった。表1は、筆者が平成21年に調査及びアンケートを行って得た、各集落の七夕踊への参加形態と、その組織構成である。あくまで大里全体の動向を探る目的のため、集落名は示していないが、平成21年時点での団員数、その時点での地域外在住者数、平成21年の七夕への不参加者数、入退団年齢、七夕踊以外の団の活動などをまとめている。任意の調査であるので参考程度ではあるが、これを見ても分かる通り、現在では団員数が一桁という青年団も少なくない。筆者が調査を行った平成20年の七夕踊には、ついに一つの集落が太鼓踊りを出すことができなかった。後に見るようにそれまでも様々な事情で太鼓踊りを出さなかった集落はあったが、出す意思がありながら人手の不足のために踊り番を出せなかったというのは、大里の人々の記憶にある限り初めてではないかという<sup>10)</sup>。また同じく平成21年にも、やはり団員の不足から2集落の青年団が合同で踊り番を1人出すことになり、この年も14人の踊り手が揃わなかった。まさに現在、青年団が主体となり、14の集落が総出で行う七夕踊という伝統は大きな困難に直面しているのである。

しかしここでぜひ注意を促しておきたいのは、こうした困難な状況を、そのまますぐに伝承者の意欲や関心の低下、すなわち伝承の脆弱化と結びつけて考えるのは危険であり、誤りであるということである。青年団員数の絶対的な低下は、地域の社会・経済のあり方を含めたより大きな文脈から、場合によっては不可避免的に生じることかもしれないが、それと担い手の一人一人の伝承に対する意欲や献身の程度や、伝承の活性化への潜在的なポテンシャルは、必ずしも一致するわけではないはずである。

もちろん、七夕踊の伝承に対する意欲や献身の度合いは、大里地区全体でも、また各集落の青年団員においても一様ではなく、それを世代ごとや集落ごとに並べて優劣をつけることに意味はない。ただし伝承への関わり合い方の変遷を多方面から検証することは、これから七夕踊を地域の人々がどの

夜間に青年たちが青年舎に集って歓談したり、新年会・花見といった行事に宴会をするなど、あくまで集落青年の親睦団体という性格に変わりつつあった。それまで青年団が引き受けていた集落共有施設の修繕や、消防、夜警、墓掘りといった奉仕活動は専門職化して切り離され、官製青年団組織の弱体化で身体鍛練や修養といった上意下達的な活動から解放された。その結果、ほとんどの集落青年団にとって唯一主体的な活動として残されたのが、七夕踊への参加であった。

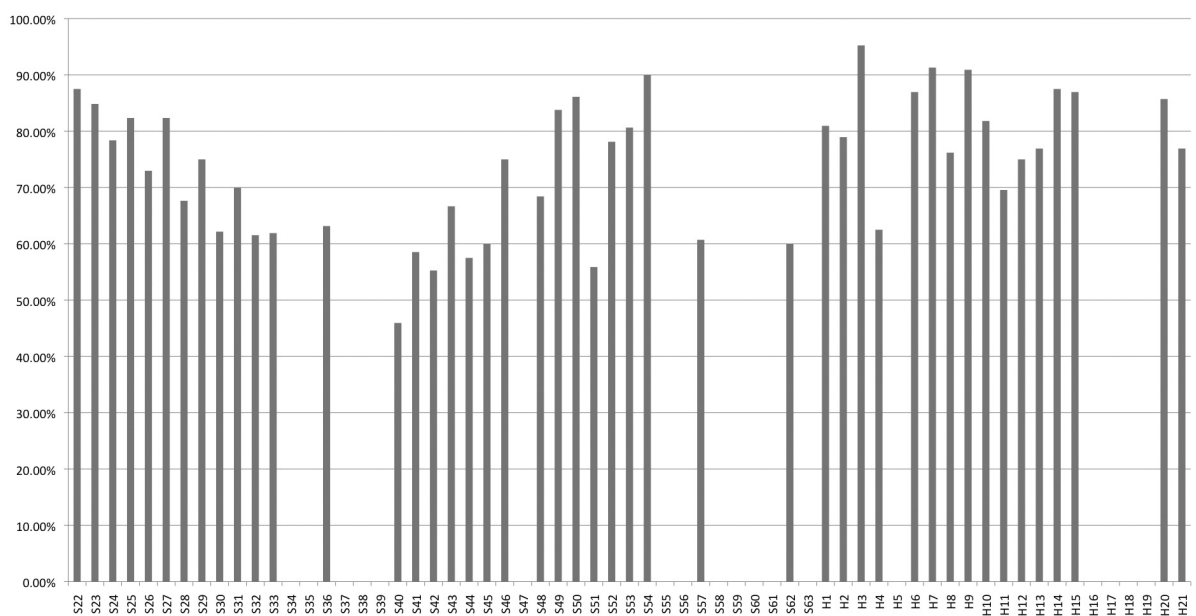
ように伝えていくかを自分たちで考える際に役立つであろうと思われる。

例を挙げて考えてみよう。前述の寺迫青年団の「七夕踊日記帳」には、年によって各団員の参加／不参加も記録している。これを参考に、各年の団員全体における七夕踊への参加割合を集計してみると、図3のようになる。年ごとのバラつきが大きく、また記録に不備な部分も多いのではあるが、これを図2の団員数の推移の図と比較してみると興味深いことが分かる。すなわち、全体的な傾向として、団員数が多い昭和30年代に、七夕踊への参加割合が顕著に低くなっており、逆に団員が減少し伝承の困難が言われるようになっていくこの10年ほどの方は、参加割合はむしろ高くなっているのである。

現在は団員数の減少によって、団員一人一人が担う役割は相対的に大きくなっている。もともと少ない団員のなかで1人が欠けることは、仲間により大きな負担を強いることになるという責任感が芽生えたと考えるのも、あながち不自然ではないだろう。その一方で昭和30年代の状況に目を向ければ、すでに人口動態のところで見たように、この時期は大里地区で人口流出が最も進んだ時期である。青年団では、その時点で転出している集落出身者でも、たとえば実家が集落内にまだあるとするならば、団員に含めて考えているはずである。つまりこの時期には、そもそも集落内に在住していない者も団員数に相当含まれており、若い労働者として出稼ぎに出ている立場上、七夕に帰郷することができず、青年団の方も彼らがいなくとも、もともと団員数の分母が大きかったので、七夕踊への参加に大きな支障を生じなかったと考えることが可能である。

その一方で、昭和30年前後には、青年団のあり方自体に対する疑念が若者の間で芽生え、旧市来町においてもいわゆる官製青年団型の組織が機能なくなる時期であったこともすでに指摘した。こうした背景が影響していることも考えられよう。寺迫青年団の団員数の推移を示した図2のなかで、昭和34・35年にデータが無いのは、この期間、青年団として七夕踊に参加しなかったために、「七夕踊日記帳」に記録が無いからである<sup>18)</sup>。不参加の理由ははっきりとは分からないが、当時の青年団の中

図3 寺迫青年団の七夕踊参加割合（昭和22年～平成21年）





に、青年団としての七夕踊への参加に疑問を持つ者らがあつたからだと言われており、それは町内で、あるいは全県的・全国的に、青年団組織がその役割を失っていったという社会的な背景を抜きに考えることはできない。それが単に個人的な判断だつたわけではないことを示すように、同じようなことは他の集落でも起っている。やや時代は後になるが、昭和42年（1967）の七夕踊には、当時の青年団長らの判断で島内集落が参加せず、これが他集落にも動揺を与えて、この年には貧弱なウシが2頭出ただけであつたということを『南日本新聞』の記事は伝えている〔昭和54年9月12日の「かごしま探検」より〕。

確かにこういった出来事は、七夕踊の伝承の過程から見れば危機の局面であつたかもしれない。しかし結局、寺迫の場合も島内の場合も、彼らはすぐに七夕踊に戻ってきた。しかもただ戻ってきただけでなく、こうした出来事自体が、七夕踊への関わり方を再考する契機ともなつたようなのである。寺迫集落では、七夕踊に復帰した昭和36年に、新しい「七夕踊細則」を定めているし、島内集落ではこの出来事後、それまでの青年団主体から、青年団を丸ごと含みながら年齢の上限を35歳に引き上げた「七夕会」を結成し、以後はこの会を主体として七夕踊に参加するようになった。

## 5. おわりに ー七夕踊と青年団のこれからのためにー

このように、地域の人々ですら構造化された規範として、当たり前のもので受け入れている七夕踊と14集落の青年団との関わりも、実際には何度も困難や変革に直面し、そのたびに新しい関わり方を模索して続けられてきたことの結果なのである。七夕踊の伝承組織としての青年団は、その規範的な性格が強いためにいかにも自律的で本質的な存在と捉えられがちであるが、実際には、近世の二才組ですら、郷中教育的な徳目によって律せられた団体として現れてくるのはおそらくその後期に至ってであろう<sup>19)</sup>。そして明治後期から大正期にかけての官製青年団としての青年組織の再編と戦後のその崩壊は、それぞれ青年団のあり方や七夕踊との関わり方に大きく影響した。そして昭和40年代後半からの団員の減少。いずれも、地域の生活という内在的な要因というよりも、それを取り巻く大きな社会の変革のなかで、七夕踊の伝承に揺さぶりをかける事態であつたが、それを乗り越えてきたからこそ現在の七夕踊があるのである。

本稿では、青年団という伝承組織の問題に焦点を当てたため、どうしても制度の変遷を追うことに終始してしまつた感があるが、その一方で七夕踊の伝承のあり方を大きく規定してきたもう一つの要因は、言うまでもなく地域の生活様式の変化である。

本稿のはじめに述べたように、七夕踊は地区の中でも大里田圃を中心とした農業に従事する集落が寄つて担うものである。この田圃は天和4年（1684）の井堰の構築と用水路の整備によって開かれたものと言われ、この開田に貢献したという伝説的人物、床次到住への感謝を込めて七夕踊が毎年踊られるようになったと伝えられている。今もナラシが毎晩行われ、また七夕当日も最初と最後の踊りの奉納が行われるのは、この到住の碑と伝えられるものが立つ堀ノ内庭である。

実は聞き取りによって得られる七夕踊の変遷に関わる話題で最も多いのは、大里田圃での農業のあり方に関わるものである。年配者に七夕踊の思い出を聞いた際に、かつては田植などの農作業を集落

共同で行っており、そういった機会や、田植あとのサノボリの集まりのときに、踊りについての相談をしたものだという話を聞いた。大里田圃はその水利を、井堰を用いた用水路に大きく頼っているために、家ごとの農作業のスケジュールもほぼ同一で、戦後しばらくまで田植や稲刈などの共同作業は当たり前だったという。だからこそ、踊りの相談も自然とできたとし、ナラシから七夕の期間、皆が一致して踊りに打ち込めたのである。井堰構築の功労者としての到住を讃えて踊りを奉納する心性は、こういったところに淵源しているのだろう<sup>20)</sup>。昭和30年頃からの出稼ぎや勤め人の増加は、このような比較的均一な生活様式を大きく変えていった。七夕踊への参加も、青年団員個々の生活事情を考慮しなければならなくなった。農業を生業とする生活様式に由来する踊りに託された思いは、時代とともに変わっていく。到住の名前と功績は今も多くの人に意識されているが、筆者が調査に出かけた最近の踊りでは、かつて踊りを奉納する場所として挙げられていた上の実盛<sup>かみ さねもり</sup>ドン、下の実盛<sup>しも</sup>ドンという2ヶ所の実盛塚での奉納は無くなっていったようであった。実盛の霊を慰め虫害を除けるということが、もはや切迫した希求とは言えなくなったからだろうか。生活が変われば踊りも変わるのは当然である。

その意味では、青年団と七夕踊との関わりは、義務的な参加や、青年が壮年になるための通過儀礼的性格を持つ太鼓踊りという、基本的な部分では大きく変化していない。しかし明らかに一つ大きな変化があったことといえば、官製青年団の末端組織としての機能を失った昭和30年頃を大きな転機として、時代が下るに連れて青年団の機能が、徐々に七夕踊への参加に特化されてきたということである。表1に見られるように、現在の14集落の青年団で、七夕踊以外に独自の活動をしている団体は、新年の挨拶回りといったごく一般的なものを除けば、2団体のみである。つまり現在の集落青年団は、七夕踊という実践への参加を通してはじめて顕在化する集団になっているのである。だがそうした変化はすでに官製青年団の公的活動の主体という文脈を失ってからずっと進行してきたのであって、最近になって何かが突然変質したわけではない。七夕会のような団体に移行するのも、そこにある実質的な違いは退団年齢だけであるし、あるいは近隣集落と合同で参加するという形態も、何よりも七夕に踊りを出すことを最重要と考えた結果だろう。青年団という名称が変更されたり、14集落の踊り手が揃わなかったりするというその事実だけを見ればドラスティックな変化かもしれないが、それはこの50年ほどの、あるいは七夕踊が二才によって伝承されるものとなって以来のすべての歴史的過程の、現時点での自然な帰結であると言えるのではないか。年齢の一定の区切や、集落の範囲（それすら自然的に発生した不変のものではないことは本稿の最初に検討した通りである）などといった目につきやすい指標を過度に固定的に捉えて、それをもって青年団という組織や七夕踊という実践の本質的条件と考える必要はないだろうと筆者は考える。

もちろん、これから七夕踊と青年団がどのようにに関わり合い、どのように維持されたり変わっていったりするのかを最終的に決めるのは、これに関わる地域の人たち自身である。実際にいま、多くの集落青年団や七夕踊に関わる者のあいだで、眼前にある踊り手の不足という困難にどう対処すべきか様々に考えられているようであった。筆者が聞いたものだけでも、青年団の退団年齢を上げる、七夕青年団に移行する、他集落の青年を勧誘する（といっても「大里地区内に限る」という条件が付けられることが殆どだったが）、子どもの役割を作るなど、様々な意見があった。筆者が同席したある庭

割の集まりでは、冗談交じりではあるが、女性も参加を認めるという過激？な意見もあった。いずれ彼らは彼らなりの判断で、何らかの改革を行うのだろう。

最後に一つのエピソードを紹介して本稿を閉じたいと思う。踊り手の不在への対処という問題は、決してごく最近になって初めて生じたわけではないという話である。前に紹介した中原青年団の戦前の日誌の昭和9年（1934）7月20日の条に、同年の七夕踊に際して、「踊子が三人共金で済ますといふので、峠のYに問ふて見るよう協議」したとある（引用に際し個人名は伏せた）。調査の中で年配の方々から、昔は踊りたくても人が多くて踊れない者がいくらでもあって、太鼓踊りを務めるのはたいへん名誉なことだったという話ばかりを聞いていたので、これを読んでやや意外に思ったのだが、満州事変の勃発以来、集落からも出征者が出始めるような緊迫した時代であったことを考慮しなければならないだろう。結局この年は、他の一人とともにこのY君が踊り手を務めることになったようである。もちろん筆者はこの「峠のY君」を知らないが、あえて地名を付されて書かれていること、その「峠」というのは、同じ日誌の昭和6年8月29日に「次回より峠の青年も必ず小会・大会に出席する事」、また昭和7年1月7日に「峠に新に支部長を置く」などと言及されていることなどから、おそらくそれまで青年団にも、七夕踊にも親しく参加しておらず、新しく中原青年団に組み込まれるようになった、集落内の周辺の地区なのではないかと推察できる。七夕踊の伝承組織はこのように、もうずっと以前から、絶えず新たな成員を迎えて再編されるダイナミックな集団であったのである。

## 謝 辞

現地調査に当たっては、大里地区のすべての青年団の皆さん、庭割の皆さん、大里七夕踊保存会、いちき串木野市教育委員会文化振興課をはじめ、多くの地区の方々にお世話になった。とりわけ寺迫青年団の皆さんには、他所者の筆者を暖かく受け入れていただき、多大な協力をいただいた。また、中原青年団の日誌の翻刻を、國學院大學大学院の小西沙和さんに手伝っていただいた。ここに記して感謝の意を表します。

## 《注》

- 1) 平成18年（2006）の住民基本台帳人口統計によれば、大里地区に含まれる公民館は、平佐原、松山、弘山、松原、崎野、戸崎、堀、平ノ木場、中原、島内、宇都、門前、迫田前、木場迫、中福良、寺迫、下手中、佐保井、陳ヶ迫、池ノ原、駅前である。これらは近年でも変遷しており、例えば旧市来町の人口統計では、昭和60年まで松原集落は農民出身と士族階級出身で2つに分かれており、士族階級出身者は七夕踊に参加しなかったという。また迫田前集落は昭和60年の統計に初めて現れている。
- 2) 公民館という呼び方は単に社会組織のみを指すわけでないことは言うまでもなく、基本的にすべての集落には公民館と呼ばれる施設があり、そこが七夕踊の会合や稽古も含め、集落の住民が共同で行う活動の拠点となっている。公民館の場所や建物は、かつて集落の青年舎であったところが多い。

- 3) なお、『鹿児島県教育史』に「郷中というのは方限の意味で、元来区域をさすのであるが、薩摩時代には同じ区域すなわち同一方限内における青少年の士風練磨を目的とした団体をいった」とあるように〔鹿児島県教育委員会 1961: p.83〕、郷中という言葉は社会組織の区域的な単位として使われる場合と、後に述べる青少年の教育制度としての郷中教育の主体として言及される場合があるので注意が必要である。
- 4) 一般的には郷中（郷）という組織は、方限の範囲がその単位となっていると理解されることが多く、その場合木崎の説明は組織の規模の点でつじつまが合わないが、筆者にはこの蓋然性を判断する能力はない。また近年は、この方限と郷中の関係についても疑問が持たれているようだが、ここで詳しく検討することはできない。安藤保の論考などを参照のこと〔cf. 安藤 1991〕。
- 5) 今では七夕踊に参加するのは14集落であるというのが既定の事実と受け取られているが、これにもある程度の変遷があったようである。昭和16年（1941）刊の『市来町郷土史』には崎野がウシを出していたことが記載されており、あるいは小野重朗の報告では同じく崎野が大名行列に参加していたという〔小野 1993〕。また筆者の聞き書きでも、新興住宅地になる以前の佐保井は他集落と合同でウシを出していたという。
- 6) ナラシ及びウチナラシという実践自体が、七夕踊を考える際にきわめて重要であり、この過程への参加こそが、七夕踊を伝承するということの意味の大半を占めると筆者は感じている。本稿ではあくまで青年団を中心とする伝承組織について記述するが、いずれこのナラシの実践について考える別稿を用意するつもりである。
- 7) データはいちき串木野市教育委員会文化振興課提供のものを、筆者が集計した。
- 8) 昭和31年（3540人）から昭和36年（3173人）の5年間の人口増加率は-10.37%で、データがとれる5年間では最大の低下率である。
- 9) 昭和36年から昭和46年（2577人）の10年間の人口増加率は-18.78%である。
- 10) 昭和63年（2347人）から平成10年（2114人）の10年間の人口増加率は-9.92%、平成10年から平成20年（1842人）の10年間では-12.87%である。
- 11) 特に出典を明記したもの以外、旧市来町の青年団の動向については『市来町郷土誌』を参照した。
- 12) 「二才咄格式定目」を郷中教育の条目として扱うことには近年批判もあるようだが、筆者自身にはその妥当性を判断する能力はなく、ここではあくまで定説に従っておく〔cf. 安藤 1990〕。
- 13) 郷中教育の制度については、『鹿児島県教育史』及び松本彦三郎、北川鐵三の論考などを適宜参考にした〔鹿児島県教育委員会 1961、松本彦三郎 1978、北川鐵三 1981〕。
- 14) 日露戦争時の青年組織の軍事後援活動については、岩田重則が静岡県の実例を中心に紹介・考察し、戦時に自発的な活動を行っていた若者の集団が、内務省や文部省の通牒によって組織的に再編される過程が、近代国家における若者の統合政策の嚆矢であったことを指摘している〔岩田 1996〕
- 15) 全国的な青年団の組織化については、主として平山和彦の論考を参考にした〔平山 1988〕。
- 16) 西市来村青年団は、川南、川北、湊、川上の4分団に分かれていた。なお中原青年団の日誌によれば、昭和7年3月に川北・川南分団は合併し、大里分団を名乗ることになった。

- 17) 実際にはこれ以前から、いくつかの集落で青年団員の不足は深刻化しており、本来は一生に一度の機会という太鼓踊りを、同じ者が何度も務めることでこなしていたのが実情であった。しかしついにそれも叶わなくなったという意味で、この出来事は大きく受け止められた。
- 18) 昭和47年にデータが無いのは、「七夕踊日記帳」の記載に不備があると思われたため、筆者の判断で集計をしなかったからであり、この年は七夕踊に参加している。
- 19) 鹿児島県の、あるいは大里の二才組の発生について歴史的経緯を具体的に明らかにする準備は筆者にはないが、民俗学における若者組研究の蓄積は、若者組が自律的な集団として自然発生したのではなく、近世後期になって、村やそれを取り巻く藩の秩序維持のための様々な施策に対応して、抵抗と服従の両面の性格を合わせ持って歴史的に形成されてきたものであることを明らかにしている。そうした研究の代表的なものとして、平山和彦、古川貞雄、岩田重則などの論考を参照のこと〔平山 1988、古川 2003、岩田 1996〕。
- 20) 新町正は綿密な歴史考証から、この床次到住は実在しないか、少なくとも大里田圃の開田とはまったく異なる時代の人物であったことを明らかにしている〔新町 2004〕。筆者も新町の考証は説得力のあるものだと考えているが、ここで述べているのは史実としてではなく、「開田と井堰構築の功労者に踊りを捧げる」という地域の人々の心性についてである。

#### 《参考文献》

- ・ 安藤保 1990 「郷中教育の再検討試論」 『近世近代史論集』 九州大学国史学研究室編 吉川弘文館
- ・ 安藤保 1991 「郷中教育の成立過程（上）－「咄相中から郷中へ」の諸問題について－」 『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』42 鹿児島大学
- ・ 池田弥三郎 1972 『芸能と民俗学』 岩崎美術社
- ・ 市来町教育会編 1941 『市来町郷土史』 市来町教育会
- ・ 市来町郷土誌編集委員会編 1982 『市来町郷土誌』 市来町役場
- ・ 岩田重則 1996 『ムラの若者・くにの若者－民俗と国民統合』 未来社
- ・ 小野重朗 1993 「七夕踊り」 『小野重朗著作集 南日本の民俗文化Ⅳ 祭りと芸能』 第一書房
- ・ 鹿児島県教育委員会編 1961 『鹿児島県教育史』 鹿児島県立教育研究所
- ・ 鹿児島県日置郡編 1974 (1923) 『日置郡誌』 名著出版
- ・ 木崎三平・木崎正森 2005 『ふるさとの伝承－鹿児島県市来町』
- ・ 北川鐵三 1981 (1972) 『薩摩の郷中教育』 鹿児島県立図書館編 大和学芸図書
- ・ 新町正 2004 「七夕踊～床濤到住と捨範叟～」 『文化いちき』12 日置郡市来町文化協会
- ・ 平山和彦 1988 (1978) 『合本・青年集団史研究序説』 新泉社
- ・ 古川貞雄 2003 『増補・村の遊び日－自治の源流を探る』 農文協
- ・ 松本彦三郎 1978 (1944) 『郷中教育の研究』 大和学芸図書



## [Summary]

Dynamic State of Organizations Transmitting Folk Performing Arts  
through the Example of *Osato Tanabata Odori*

HYOKI Satoru

In the present article, the author aims to describe the recent situation of how organizations transmitting folk performing arts have been reorganized, taking the case of *Osato Tanabata Odori* (important intangible cultural property) in Ichiki-kushikino city, Kagoshima prefecture as an example.

*Osato Tanabata Odori* has been transmitted by the participation of 14 settlements of Osato ward. It consists of two parts: *taiko odori* by performers representing each settlement (at least one performer from each settlement) and *kammawai*, which includes several performances by people manipulating large figures made by themselves and processions. Each settlement is responsible for a part of the *kammawai* and each event is performed by the members of the young men's group of each settlement.

However, in recent years, it has become more difficult for young men's groups to participate in *tanabata odori*. The greatest reason is the decrease in the number of youth in this area. To overcome this difficulty, some settlements have launched new organizations to participate in *tanabata odori*; some have raised the age of retirement from young men's groups; still others have decided to participate jointly with nearby settlements so as to recruit enough participants.

Nevertheless, it is not possible to say that these phenomena show a decline in interest in traditions or a weakening of motivation for participation in local traditions among the people. In fact, the transmission of *tanabata odori* faced a crisis as early as in the 1960s although there was the largest number of young people in local groups in postwar history and the groups were more active than today. Rather, the ratio of people participating in *tanabata odori* today has increased, compared with that in the 1960s.

As described above, there are always rise and fall in the history of transmission of folk performing arts, and organizations engaged in transmission change accordingly. People are apt to pay attention only to the forms of expression or tradition of folk performing arts. But considering that folk cultural properties are, by nature, transmitted in the daily life of people, we need to take much more notice of the dynamic process of transition. It will also be the basis for thinking what effective support is needed in today's mobile society.

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage  
Number 4  
2010

Publisher:  
National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo  
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第4号

平成22年3月26日印刷

平成22年3月31日発行

編集 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所  
『無形文化遺産研究報告』編集委員会

編集委員	無形文化遺産部長	宮田 繁幸
	無形文化財研究室長	高桑 いづみ
	音声・映像記録研究室長	飯島 満

発行 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所  
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43  
電話 03 (3823) 2241

© 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所 2010

National Research Institute for  
Cultural Properties, Tokyo